



2002年

日本建築学会優秀卒業論文賞

日本建築学会優秀修士論文賞

優秀卒業論文賞

部門 論文名

構造 小中径木を用いたスペースフレームの開発

SVMによる健全性診断手法に関する研究

樹木を用いた耐震補強の可能性

計画 作業と施設との関係から見た漁港の就労環境評価に関する調査研究

武家屋敷地区のデザイン誘導における景観形成基準の運用実態
村上市歴史的景観保全条例を対象として病院の内部空間構成の把握に関する研究
病院空間へのパズルマップ法の適用と分析海の家を通して見た建築の機能と形態に関する研究
神奈川県相模沿岸の海水浴場に立地する海の家をケーススタディとして

十六世紀末の上京・小川通りの町 大中院文書による復原

台中市における攤販集中地区の立地特性とその可変的空間構成に関する研究

白川村合掌造り民家における空間構成と儀式

戸建住宅の風除室にみる住まい観の表われ方

高岡市金屋町における世帯数の増減にともなう住戸空間の変容に関する研究

特別養護老人ホームにおける居室と共用空間のあり方が
入居者と家族との日常的交流に及ぼす影響に関する研究
個室型と多居室型特別養護老人ホームの比較を通して

環境 設計用気象データの決定に関するシミュレーション研究

通風による室内温熱環境改善のための気流制御に関する研究

受賞者

正会員 瀧野敦夫 君 (大阪大学)

正会員 萩原宏美 君 (慶應義塾大学)

正会員 鷲崎 亮 君 (名古屋工業大学)

正会員 穴井美緒 君 (日本大学)

正会員 小柳 健 君 (新潟大学)

正会員 斉藤雅之 君 (小山工業高等専門学校)

正会員 清水章之 君 (日本大学)

正会員 早見洋平 君 (信州大学)

正会員 松尾桂一郎 君 (九州大学)

正会員 満田さおり 君 (京都女子大学)

正会員 持田 玲 君 (筑波大学)

正会員 森内昭光 君 (新潟大学)

正会員 米山剛史 君 (京都大学)

正会員 小川朋子 君 (東京都立大学)

正会員 竹田智哉 君 (東北大学)

優秀修士論文賞

部門 論文名

構造 残留変形を抑制するパッシブ制振システムに関する研究
復帰型摩擦ダンパーを中心として

硬化型非線形復元力をもつ制振架構の振動応答

CFRPによって局部座屈形成を抑制した円形鋼管柱材の耐力と変形能力

計画 特別養護老人ホームの個室化、小規模ユニット化が
入居者の生活展開とケアに与える影響に関する研究
多人数居室型から完全個室型への建て替え事例の追跡調査を通して

ヨーロッパにおける日本の建築文化の理解と受容に関する研究

彝族平頂土掌房における住様式の持続と変容
中国雲南省・伝統的陸屋根住居の空間構成に関する研究ホームレスコミュニティの共生型居住に関する研究
渋谷区宮下公園における当事者参加型調査を中心として

受賞者

正会員 笹本好章 君 (早稲田大学)

正会員 佐藤大樹 君 (東北工業大学)

正会員 古川哲也 君 (神戸大学)

正会員 海道真妃 君 (京都大学)

正会員 金刺礼子 君 (神戸大学)

正会員 佐々木大 君 (東京理科大学)

正会員 全 泓奎 君 (横浜国立大学)

古木普請 近世・高山における古材を巡る建築活動

正会員 中村琢巳 君 (東京大学)

都市における現代家族のネットワーク居住の実態とその住まい方
神戸市東灘区御影山手の戸建て住宅を中心として

正会員 中本裕美子 君 (神戸大学)

稲作農耕の景観分析と風景価値に関する研究

正会員 額田直子 君 (滋賀県立大学)

リウマチ患者の住居整備に関する研究
実態調査に基づく障害特性に応じた整備方法と支援のあり方に関する考察

正会員 野口祐子 君 (芝浦工業大学)

セルフビルドによる版築造の実験的試み

正会員 畑中久美子 君 (神戸芸術工科大学)

季節移住の継続要因からみる複数地域居住のあり方
輪島市舳倉島の季節移住を事例に

正会員 前島一弥 君 (早稲田大学)

環境 体躯、性別、年齢を考慮した体温調節数値計算モデルの開発

正会員 小川一晃 君 (早稲田大学)

都市火災の物理的延焼性状予測モデルの開発

正会員 樋本圭佑 君 (京都大学)

経過報告

選考経過

選考報告

本会では、1989年7月に設立された日本建築学会「建築教育振興基金(タジマ基金)」による学生を対象にした論文の顕彰事業で「優秀卒業論文賞」「優秀修士論文賞」を設け、優れた論文を表彰している。本年はその第13回である。

本年も多くの方から応募があり、早速、卒業論文等顕彰事業委員会の中に選考部会(部長: 絵内正道・北海道大学教授)を組織して選考に入った。同選考部会では、短期間であったが精力的に作業が進められ、厳正なる選考が行われ、表彰論文を決定した。

今回受賞された論文の著者に対して心からお祝い申し上げますとともに、選考部会のご努力に改めて敬意を表す。また、残念ながら選考にもれた論文の中にも内容的には表彰論文と大差ないものも多々あった。応募者全員のご努力を多とするものである。

この事業は本年度で13回目となったが、これまで選考過程で生じた改善を要する事項については、毎年十分に検討・審議のうえ改善しており、事業の意義は、高い評価を得て確立されてきたものと確信している。

なお、本年の公募に際して多大なご尽力をいただいた各大学の関係者に心からお礼申し上げますとともに、今後も本事業に対して深いご理解をいただき、さらなるご協力を賜るようお願いする。

(卒業論文等顕彰事業委員会委員長 八木幸二)

1989年に設置された建築教育振興基金(タジマ基金)による「卒業論文等顕彰事業」は、2002年で13回目となる。選考部会は、卒業論文等顕彰事業委員会の下部組織で、常置の各調査研究委員会から推薦された2名(ただし、構造・環境は各3名)の委員、計24名により構成された。

第1回卒業論文等顕彰事業委員会・選考部会は、梅干野晃卒業論文等顕彰事業委員会委員長より招集され、2001年12月4日に建築会館会議室で開催された。選考委員の自己紹介の後、梅干野委員長より本事業の運営等について説明があり、運営規程、実施要領、選考要領、応募論文募集要項について審議した。また2001年(第12回)選考部会からの申し送り事項のうち、応募要項は昨年もかなり手を入れたので、今回は見送ることとし、申し送り事項については継続して審議することとした。

1 卒業・修士論文の執筆者と指導教官との関係における執筆者自身の役割の明確化
卒業・修士論文の場合、指導教授や同じ研究室の院生・学生の指導・協力というものが、著者自身がどこまで自力で論文を作成したのか、そのオリジナリティを判断することが難しい。

2 第一次選考の対象について
第一次時選考は、論文概要にて選考を行っている。このことが応募要項に明記されていない。また、論文概要について1頁の文字量に多寡が見受けられ、選考に際して公平さを欠くことや、また多量文字の概要は選考委員の労を要した。

3 第二次選考論文(本文)の分量の扱い
第二次審査に提出される論文(本文)の分量がかなり薄い論文があり、選考に際して不利な場合が見られた。この問題は大学によって制限をかけていることなども考えられるため、理由を明らかにする必要がある。

分野別受賞論文数(総応募数231編、52大学)

	構造系	計画系	環境系
卒業論文	3編(16)	10編(61)	2編(14)
修士論文	3編(23)	10編(94)	2編(23)
合計	6編(39)	20編(155)	4編(37)

* ()の数字は応募論文数



第2回卒業論文等顕彰事業委員会・選考部会は、2002年4月16日に開催し、関係規程類の確認、応募論文数および各部門別分類（構造系、計画系、環境系）の確認を行い、部門別分類に変更がないことを確認した。応募論文数は、卒業論文91編、修士論文140編の計231編で、昨年より32編増加した。応募大学数は52大学で、昨年より5大学減った。部門別では、構造系39編（学部16、修士23）、計画系155編（学部61、修士94）、環境系37編（学部14、修士23）であり、それぞれ前年より総数32編増（学部：11編増、修士：21編増）であった。

授賞候補論文数については応募論文数に応じ、卒業論文は構造系3編、計画系10編、環境系2編の計15編とした。同様に修士論文は構造系3編、計画系10編、環境系2編の計15編とした。各部門ごとにこの授賞候補論文数の範囲内で選考を行い、他部門との振り分けなどはしないことを確認した。

梅干野委員長より、選考部会長として絵内正道が指名され同日選考部会が開催された。各部門別の部会を設置し、部会長を互選（構造系：中井正一君、計画系：浦江真人君、環境系：野口太郎君）し選考を開始した。選考要領について再度確認を行い、選考の基本的な方法は従来どおり二段階選考とした。

第一次選考は、2002年5月8日に開催し、各部門の選考委員が論文概要を精読して授賞候補論文数の約2倍の論文を選考し、第二次選考は、2002年5月29日に開催し、第一次選考で選ばれた論文1編につき2名の査読委員を定めて論文本文を精読し、表彰候補論文を選考した。具体的な選考は各部会に一任することとした。なお、選考は公正かつ慎重に行うことを旨とし、とくに選考委員と応募論文の著者が親族、師弟関係などにある場合には、その論文の選考に関わらないことを確認した。

各部門別の選考終了後、第3回卒業論文等顕彰事業委員会・選考部会を2002年6月6日に開催し、各部会の部会長から選考経過と選考結果が報告された。各部会の選考結果に基づき審議し、選考報告および推薦理由書の確認を行い、選考部会出席者全員の一致をもって2002年（第13回）の表彰候補論文として、卒業論文15編、修士論文15編を選考した。
（2002年卒業論文等顕彰事業委員会選考部会長 絵内正道）

■構造系部会

本年の構造系の応募論文数は、卒業論文16編、修士論文23編であった。応募大学数は16校で、昨年に比べて9校減少した。

第一次選考では、7名の選考委員が39編すべての論文の概要を査読し、三段階評価の採点を行い、卒業論文については上位5編、修士論文については上位5編を第二次選考対象として選出した。第二次選考では、第一次選考を通過した合計10編の論文のそれぞれを2名の選考委員が精読することとした。卒業論文においては、「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の3項目、修士論文では「テーマの独創

性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の5項目に留意して、総合的な評価点を与え、その得点順位により授賞候補論文を選定することを原則とした。最終選考はそのうえで無記名投票により行い、卒業論文については上位3編、修士論文については上位3編を授賞候補論文とした。

卒業論文、修士論文ともに、何年間にわたる勉学・研究の集大成であり、内容の濃い研究成果が理路整然と提示されるさまはまさに圧巻である。今年度も、例年に増して力作揃いであったと言える。研究対象は今まさに注目を集めているテーマが多いものの、中には地道なテーマに新たな視点を当てるもの、ホットなテーマにひとひねりした手法でアプローチするものもあり、読んでいて飽きない。緻密な議論を系統的に展開し、整然とまとめられたものから、荒削りではあるが個性的なひらめきを感じられるものまで、完成度の点でも様々である。卒業論文・修士論文は、通常、指導教官の指導の下に行われるため、中には論文執筆者である学生の貢献がどの程度であるのか判断に苦しむものもある。また、一連の研究に完全に組み込まれ、全体が見えにくい論文もある。このような多様性の中から少数の授賞候補を選ぶのは至難の業であり、選に漏れた論文にも賞に値する論文が多数あったことを申し添えたい。

（構造系部会長 中井正一）

■計画系部会

本年の計画系の応募論文数は、卒業論文61編、修士論文94編の合計155編であった。これらを計画系選考委員13名で選考した。ちなみに昨年度は卒業論文45編、修士論文72編の合計117編、一昨年度は合計125編であり大幅な増加となった。選考部会での授賞論文数の割当ての結果、卒業論文10編以内、修士論文10編以内となった。

第一次選考は、論文概要梗概により行った。一論文につき、4または5名の委員が査読をし、それぞれの論文をABCの3段階によって評価した。そして評価の合計の高い順に授賞論文数の2倍を目安に第二次選考対象論文とした。その結果卒業論文22編、修士論文18編となった。選考過程で、論文の概要の1ページの文字数と行数が応募要領から大きく逸脱（超過）しているものは、評価対象としての不公平性から第二次選考対象から外すこととした。そのほかにも、図表などの文字が小さいなど判読に苦勞を要するものが見られ、結果的に評価に影響を与えてしまった論文が見受けられた点が残念であった。

第二次選考では、選考委員の専門分野を考慮しながら、対象論文のそれぞれについて2名の査読者を選び、論文本文により評価を行った。評価の内容は、卒業論文については「テーマの内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の総合評価である。修士論文については、「テーマの独創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の総合評価である。この評価結果

をもとに計画系部会を開催し、講評と論文本文を参照した後、出席委員による無記名投票を行い投票数の上位から卒業論文10編、修士論文10編を決定し授賞候補論文とした。

(計画系部会長 浦江真人)

環境系部会

本年の環境系の応募論文数は、卒業論文(計画系から移動1件)14編、修士論文(計画系部会から移動1件)23編の合計37編であった。一昨年(卒業論文19編、修士論文12編)、昨年(卒業論文17編、修士論文14編)と比較すると総数としては微増であるが、修士論文の比率が大幅に増加している。応募論文の研究分野は、音6編、熱5編、空気8編、都市9編、心理・生理4編、その他5編で、空気質や都市気候にかかわった応募が増大したように思われる。

第一次選考では、4名の選考委員と第一次選考から加わっていた2名の外部専門委員が全応募論文の概要を査読して3段階の評価を行い、評点の高いものから授賞候補論文数(卒業論文2編、修士論文2編)の約2倍に相当する卒業論文4編、修士論文6編を一次候補として選出した。この作業に際し、

著者と関わりのある委員の評点は除外した。

第二次選考では各選出論文につき2名の査読委員を、選考委員ならびに外部専門委員の中からその専門性を考慮して決定し、10編の本論文を精読することとした。卒業論文についてはテーマと内容「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の3項目、修士論文についてはテーマの独創性・新規性「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の5項目の各評価項目について5段階で評価し、さらに総合評価(3段階)を行うとともに講評を作成した。第二次選考では、各論文の講評および評点と総合評価を審議した後、選考委員による無記名投票を行い、卒業論文2編、修士論文2編を授賞候補論文として推薦することとした。

第二次選考に進んだ論文については、相対としての軽微な差違はあったかもしれないが、いずれも優秀な論文であったことを報告したい。最後に、選考に際し真剣なご議論を頂戴した選考委員、梗概査読と本論文精読という2段階の労を頂いた外部専門委員のご協力に深く感謝の意を表したい。

(環境系部会長 野口太郎)



優秀卒業論文賞 推薦理由

小中径木を用いた スペースフレームの開発

正会員

瀧野敦夫 君.....大阪大学

論文冒頭では、間伐材の利用を高めることで環境改善に役立てようという壮大な目標を掲げている。小中径木とは丸太材で、間伐材として大量に産出される中低品質の材で従来構造材としてあまり用いられていないものを含む。論文中ではφ50～350の径の材を対象としている。これらの材をスペースフレーム(立体トラス)に積極的に利用することを目標に、実大丸太を試験体として圧縮試験、引張り試験、ラグスクリーアの引抜き試験を行っている。特に引張り試験は実大部材試験確立のための治具開発などに挑戦している。ラグスクリーアは1本引きと2本引きを比較している。ラグスクリーアは、既往のシステムトラス用ジョイントを丸太へ取り付けのために必要となるネジ接合である。

スペースフレーム(立体トラス)への適用を目指しているが、立体トラスモデルの実験や実験データを用いた解析などには至っていない。この点物足りなさが残るが、発想のユニークさと、卒論として短期間に学生が十分理解し実行しうるテーマ設定となっている点等、学生主体の努力がよく伝わってくる優秀卒業論文にふさわしい論文である。

SVMによる健全性 診断手法に関する研究

正会員

萩原宏美 君.....慶應義塾大学

構造物の健全性評価には、多量のセンサを用いたモニタリングシステムが必要となり、またコストも膨大となるため、なるべく少ないセンサから効率的に計測データを得るシステムが求められている。本論文はSupport Vector Machine(SVM)と呼ばれる機械学習手法を用い、構造物の健全性評価を目指している点に特徴がある。特に5層構造物に関して、既報の論文をフォローしつつ本手法の有効性を示している点が本論文を明快にしておき、今後高層建物の損傷の評価に威力を発揮することが期待される。一方で、評価部分の剛性の範囲と精度の関係や、より詳細な損傷部の同定等に課題を残しているものの、卒業論文としての完成度は高いものと評価される。

樹木を用いた 耐震補強の可能性

正会員

驚崎亮 君.....名古屋工業大学

本論文は、家屋と周囲の樹木を連結することによる耐震補強効果の可能性について検討を加えたものである。論文の前半は、代表的な樹種についての力学的特性の把握に費やされている。その結果を2質点系モデルに置換し、やはり2質点からなる家屋のモデルに連結し、いくつかの興味深い結果を明らかにしている。言うまでもなく、樹木は、重力に反発し最も効率よく育つよう進化してきた軽量構築物であり、その強度・靱性を利用しない手はない。このように、設定されたテーマは非常にユニークであり、論文の構成や採用されている実験・解析手法もシンプルながら正統的なものである。読んでいて楽しく、また、テーマ性(環境に優しい)からも興味深い論文と言える。

作業と施設との関係から見た 漁港の就労環境評価に 関する調査研究

正会員

穴井美緒 君.....日本大学

漁港の就労環境の改善を目的とし、その評価手法を導くというテーマは重要な意義をもち、研究の視点・位置づけも明快である。研究方法として定量、定性の二つの調査データを用い、とくに、研究の獨創性を示すOWAS法による作業姿勢の定量的分析では、現場における的確なデータを得て、信頼性の高い結果を導いている。結論では、定性、定量分析の総合的な評価から空間計画に反映するような展開に至らなかったことが惜しまれるが、論文全体に研究者としての客観的な視点が行き届き、AC評価の具体的適用による有用な知見を導いたことは卒業論文として高く評価される。

武家屋敷地区の デザイン誘導における 景観形成基準の運用実態 村上市歴史的景観保全条例を対象として

正会員

小柳健 君.....新潟大学

本研究は歴史的まちなみ地区を対象に、229件の膨大な現地調査と、仔細な建物形態分析から、対象地区のデザイン誘導方策の問題抽出とあり方を論じている。論旨は明快であり、分析プロセスが克明に記された点は、研究者の真摯な研究姿勢をうかがわせる。また、問題抽出にとどめず今後の方策まで論じた意欲的展開は、本研究の有用性を高めており、計画系論文として高く評価できよう。本研究の分



析結果 類型結果 かつ 村上らしさを規定するかについて客観的検証が
 またれるが、本研究と研究者の今後の発展が期待できる優秀論文で
 ある。

病院の内部空間構成の 把握に関する研究 病院空間へのパズルマップ法の 適用と分析

正会員
 斉藤雅之 君……小山工業高等専門学校

パズルマップ法により病院内部の空間認知の仕組みを把握し、人
 に迷いを与える要因と建築空間の関わりについて明らかにすることを
 試みている。順当に実験・分析が進められており、論文として必要な内
 容が過不足なく盛り込まれた、しっかりとした内容の卒業論文として仕
 上がっている。実験のサンプル等に限界はあり、本研究結果のみから
 多くの結論を導き出すことは難しいが、病院の建築計画に結びつきそ
 うないいくつかの示唆が得られており、今後の発展性が期待できる論文
 として評価できる。

海の家を通して見た建築の 機能と形態に関する研究 神奈川県相模沿岸の海水浴場に 立地する海の家をケーススタディとして

正会員
 清水章之 君……日本大学

「海の家」は、近年多目的に利用される傾向にあり、その形態も複雑
 化している。しかし、仮設物であるため実態が明らかにされておらず、
 法的規制の整備も不十分である。本研究では、相模湾沿岸の海水浴
 場29カ所にある209の「海の家」を対象にデザイン・サーヴェイとヒア
 リング調査を行い、その機能と形態の特性を見出そうとしている。とくに、
 従来の典型的な機能と近年見られる新しい機能との比較を行い、機
 能に伴う形態の変化を考察している。論文題目にある「建築の機能と
 形態」までは研究が展開されていない点が残念ではあるが、膨大かつ
 詳細な調査をもとに意欲的「海の家」に取り組んだ労作として評価で
 きる。

十六世紀末の 上京・小川通りの町 大中院文書による復原

正会員
 早見洋平 君……信州大学

本論は、平成元年に発見された豊臣政権下の京都に関する貴重な
 史料『大中院文書』をもとに、天正15年(1587)当時の上京・小川通りの
 町の様子を家屋敷の敷地境界線、道路境界線を復原することにより
 明らかにし、またこの復原結果をもとに当時の小川通りの都市空間形
 成過程における位置づけを考えようとしたものである。

様々な仮定に立ちながらも困難な復原に挑戦を試みた労作で、古記
 録を解釈する一つの方法を示している。一つの提案であるにしても、得
 られた結果は興味深いものとなっている。文章表現に独特なものがあ
 り、読者にとって必ずしも親切な論文となっていない点に不満が残る。

台中市における 攤販集中地区の立地特性と その可変的空間構成に 関する研究

正会員
 松尾桂一郎 君……九州大学

論文題目の「タンファン」とは、台湾における屋台や露店等路上を占
 有して商売することの総称である。本研究は、よく組織化されたフィール
 ドサーベイに基づき、台中市内でそのタンファンが集中する地区を抽
 出し、その立地特性を明らかにした後、仮設的な仕掛けを用いた空間
 構成要素を類型化したものである。著者の研究動機となった日本の中
 心市街地活力低下の問題との関わりまでは論及できていないが、仮設
 的な商業空間の柔軟かつ重層的な空間利用の実態から、その独特
 の賑わいのあり様を明らかにした点に、今後の展開可能性を秘める
 優秀な卒業論文である。

白川村合掌造り民家における 空間構成と儀式

正会員
 満田さおり 君……京都女子大学

本論文は、まず白川村と五箇山の合掌造り民家の空間構成を比較
 することにより、白川村の合掌造り民家の特徴を明らかにし、そのうえ
 で空間構成の違いに最も影響を与えたと考える二つの儀式(神事であ
 るどぶろく祭りと仏事である報恩講)についての詳細な調査を行い、建築空
 間と儀式の関係を明らかにしようとしたものである。調査で儀式の執り
 行われ方、参列者、席の配列や着席順など民俗学的調査手法を取り
 入れた点に着眼点のユニークさがあり、また記録資料としての価値



もある。論理性も明確で構成もしっかりしており、卒業論文として高く評価される。

戸建住宅の風除室にみる 住まい観の表われ方

正会員

持田 玲 君……筑波大学

風除室を通して北海道の住まい観について調査したユニークな論文である。基礎調査と戸別を対象とした観察調査をそれぞれ冬期と夏期に行っている。風除室の基本的な防寒、防雪という機能を越えたところに視点を据え、風除室に生活そのものがいかに反映されるかを検討している。調査対象戸数も多く調査結果は興味深い内容を示しているが、それ以上に、地域の特徴を持った一空間に焦点を当てることで、住まい観を知るというケーススタディを試みている点が高く評価でき、優れた卒業論文と言える。

かりやすい。家具などの持ち物の持ち込み状況、入居者と家族との交流行為、居室内における持ち物配置と行為との関連、施設空間内での向き合い方、訪問に対する家族の意識など、多角的な把握を通して居室タイプの違いによる交流への影響を追求しており、説得力のある結論を導いている。この種の施設調査を行う際の調査方法として一つの模範を示している。

設計用気象データの決定に 関するシミュレーション研究

正会員

小川 朋子 君……東京都立大学

本論文は、現在の設計用気象データが安全率を見込み過ぎており、このため過剰設備をもたらしている可能性があるという問題点に着目し、空調設備の設計容量計算のための適正な設計用気象データの決定方法を提案したものである。本研究では、過去15年間の気象データを用いて、モデル建物に対する熱負荷シミュレーションを行い、熱負荷が大きくなる時の気象データを抽出・解析することにより東京、札幌、那覇の設計用気象データを作成した。研究の背景、方法、結論の記述も明快であり、卒業論文として高い水準にある。ただ欲を言えば、ある限られたモデル建物条件に対する結果の普遍性に関する考察が記述されていれば、一層優れた論文になったと思われる。

高岡市金屋町における 世帯数の増減にともなう 住戸空間の変容に関する研究

正会員

森内 昭光 君……新潟大学

本論文は、1軒の家を間口方向に仕切ることで2世帯の居住を可能にする「アイヤ」とよばれるしくみに着目したものである。「アイヤ」は世帯数の増加に対して住戸を分割することで対応してきたものだが、逆に世帯数が減少した場合は分割された住戸を買い足して拡大する。このようにして1軒の住戸単位が維持され、結果的に街並みが継承されてきたというもので、詳細な実態調査をもとにしている。分割と拡大の状況、それに伴う空間変容の実体から町全体のシステムとして明らかにしており、卒業論文として高く評価できる。

通風による 室内温熱環境改善のための 気流制御に関する研究

正会員

竹田 智哉 君……東北大学

本論文は、室内温熱環境性能を通風によって制御・維持する窓自動開閉システムの効果検証と、通風性能すなわち気流変化を左右する建物周辺の樹木配置等について検討している。

内容は、周知の事実の追認的ではあるが、温熱感に対する通風の効果、窓を介した内外の風速分布、窓の開閉によるPMVの制御限界などについても実験を通して確認するとともに、建物周辺の樹木配置と窓の開口条件により、通風の利用の可能性は大きく増大することを示している。本論文は、通風を利用する温熱環境改善方法の諸要因を明らかにした論文として高く評価される。

特別養護老人ホームにおける 居室と共用空間のあり方が 入居者と家族との日常的交流に 及ぼす影響に関する研究 個室型と多床室型特別養護老人ホーム の比較を通して

正会員

米山 剛史 君……京都大学

居室タイプの異なった施設での入居者と家族との日常的交流の実態を比較して、その相違点を明らかにするという研究方法は明確でわ



優秀修士論文賞 推薦理由

残留変形を抑制する パッシブ制振システムに 関する研究 復帰型摩擦ダンパーを中心として

正会員

笹本好章 君.....早稲田大学

本論文は、地震後の建築物の残留変形を抑制することを目的とした復帰型摩擦ダンパーシステムを提案し、その力学性能を実験に基づいて確認するとともに、提案するダンパーの実建築物への適用性について論じたものである。研究の前半では復帰型摩擦ダンパー模型の加振実験の内容が要領よく纏められており、ダンパーの性能安定性と基本的な設計仕様についても言及している。後半では地震応答解析結果に基づいて、復帰型摩擦ダンパーシステムの特性を調査し、実建築物へ適用した場合の有効性について述べている。以上、復帰型摩擦ダンパーの特性の検討から実建築物への適用に至るまで、論理構成が明快で、豊かな将来性を感じさせる優れた修士論文である。

硬化型非線形復元力をもつ 制振架構の振動応答

正会員

佐藤大樹 君.....東北工業大学

本研究は、ダンパーおよびミッター機構を組み合わせ、硬化型の非線形復元力特性をもつ制振装置を試作し、それをを用いた制振架構の振動応答特性について検討したものである。本システムに用いた制振機構を4要素モデルによりモデル化することで、加振試験および圧縮試験結果とよい一致が得られる解析結果を得た。また、3層制振フレームで行った静的加力試験および振動台加振試験より本制振装置の有効性を明らかにするとともに、実験結果を十分な精度で説明できる解析方法を提案しており、工学的に有意義な成果が得られている。よって優秀修士論文賞に値する。

CFRPによって 局部座屈形成を抑制した 円形鋼管柱材の耐力と変形能力

正会員

古川哲也 君.....神戸大学

本論文は、炭素繊維強化プラスチックシート(CFRP)補強円形鋼管柱材の短柱圧縮実験および複局率曲げせん断実験を行い、CFRP補強による局部座屈抑制効果について耐力および塑性変形能力の面から検討し、離散2断面モデルによるCFRP補剛必要長さおよび塑性変形能力の予測式を提案している。また、終局挙動までを追跡する離散断面モデルによる数値解析手法を提案し、解析精度および提案式の妥当性の検討、曲げ耐力や塑性変形能力の改善効果の原因の分析を行っている。各項目ともに、明瞭かつ詳細に記述されているが、試験体図、材料特性の記述などで不十分な点があることおよび実験結果に関する考察が必ずしも的確といえないとの指摘があった。総合的に判断して、優秀な修士論文と評価された。

特別養護老人ホームの個室化、 小規模ユニット化が 入居者の生活展開とケアに 与える影響に関する研究 多人数居室型から完全個室型への 建て替え事例の追跡調査を通して

正会員

海道真妃 君.....京都大学

建て替えによって特別養護老人ホームの居住環境が大きく変わることにより、入居者の生活展開とケアにどのような影響を与えるかを克明に客観的に追跡した成果は貴重である。建て替え1年前から1年後にかけて時間的経過を追って5回もの調査を実施し、人間と環境との相互関係に関する現象を詳しく記述している点は高く評価される。

多人数居室型に比べて個室型の方が全面的に優れているという結果が証明されており、その意義は大きい。今後は、個室型のなかでもどのような空間構成やケアの仕方がよりよい結果をもたらすのか、さらに追求を進めてほしい。



ヨーロッパにおける 日本の建築文化の 理解と受容に関する研究

正会員

金刺礼子 君.....神戸大学

本研究は、明治期に来日したドイツ人技術者が、日本の住宅建築の技法について紹介した文献を丹念に翻訳し、ヨーロッパ人が日本建築のどのような点に関心を示したかを抽出したものである。その内容は多面に及ぶが、原著の読み込みが緻密であり、よく整理された論文となっている。ジャポニスムがヨーロッパの近代建築の形成に対して及ぼした影響について、建築史的な研究が求められてきている今日、その基礎となる意義のある研究であると言える。

難しい社会問題に正面から取り組み、参加型調査を通して問題解決の可能性と課題を明らかにしようとした点に独創性・新規性が認められる、優秀な研究として評価できる。

古木普請

近世・高山における古材を巡る建築活動

正会員

中村琢巳 君.....東京大学

本研究は、飛騨国・高山における古材を用いた建築活動の分析を通し、古い木造建築を破棄することなく使い続けていった近世の様相を明らかにしようとしたものである。

史料の内容を整理し図表化することによって文章表現を簡潔にし、読者の理解を助ける努力がなされている。論文の構成もしっかりしており、歴史的資料をもとにした分析手法の一典型を見ることができる。古材の再利用という観点は、現代の使い捨て文化への強い批判ともなり得ている。

彝族平頂土掌房における 住様式の持続と変容

中国雲南省・伝統的陸屋根住居の 空間構成に関する研究

正会員

佐々木大 君.....東京理科大学

中国雲南省の伝統的陸屋根住居である彝族平頂土掌房の住様式の継承持続と変容を考察する意欲的な研究である。2つの集落について住居構成の変容を示す住居類型系統図を導き、住空間と集落の変容を7つの段階的過程にまとめて結論としているが、論文全体を通じて完成度が高く、明快に論旨が展開し、有用な結論を導いている点が修士論文として高く評価される。なおこれらの分析は、予備調査を含めて2カ月近くに及ぶ現地調査によって得られた多くのデータによるもので、とくに、描き起こされた多くの住居図面は本論文の大きな魅力ともなっている。

都市における現代家族の ネットワーク居住の実態と その住まい方

神戸市東灘区御影山手の 戸建て住宅を中心として

正会員

中本裕美子 君.....神戸大学

本研究は、現代家族の動向を、家族そのものの崩壊や消滅ではなく、家族形 の分散であると捉え、現在家族のための居住空間のあり方を探ることを目的としている。神戸市の戸建住宅地の調査から、離れて暮らす家族が、相互に親密な空間関係や生活関係を持って居住している ネットワーク居住 の実態ならびにその変化の過程を明らかにするとともに、複数住宅間でその住要求を満足させている現実があることを明らかにした。

本研究は、現代家族の変容を鋭い切り口で考察し、これまで画一的に捉えてきた1家族1住宅 の住宅計画について問題提起を行った、意義ある計画系論文であり、修士論文として高く評価された。

ホームレスコミュニティの 共生型居住に関する研究

渋谷区宮下公園における 当事者参加型調査を中心として

正会員

全 泓奎 君.....横浜国立大学

本研究は、1990年代に入って我が国の大都市で激化した『ホームレス』問題を対象としている。我が国の『収容・分類』型ホームレス対策に対する明確な問題意識のもと、丹念な論文・政策レビューと、渋谷区宮下公園における『当事者参加型調査』によるホームレスおよびホームレスコミュニティの実態調査、の両者から説得力をもって『共生型居住』の必要性を明らかにしている。



稲作農耕の景観分析と 風景価値に関する研究

正会員

額田直子 君.....滋賀県立大学

本研究は論文編と制作編の2テーマを設け、前者ではハードスケープとソフトスケープという新たな景観概念を提示し、後者では前段で導いた景観特性を人びとに印象づける手立てとして「メディア制作」を提案している。論文の展開としては、定性的な景観分析に偏重した点に課題を残すが、四季を通して地道な調査を行い、多くの文献を丹念に分析して明快に自論を展開した点は、研究者の将来性を大きく期待させるものである。また、新たな概念提示や、概念のユニークな活用手法は、高い再現性・汎用性を有し、優秀論文として高く評価したい。

リウマチ患者の 住居整備に関する研究 実態調査に基づく 障害特性に応じた整備方法と 支援のあり方に関する考察

正会員

野口祐子 君.....芝浦工業大学

本研究は、約70万人いるというリウマチ患者に焦点を当て、その住環境の実態を把握することにより、住居整備の方法と効果、および実態に即した支援のあり方を検討するための基礎的資料を整理したものである。主として、アンケート調査と訪問調査によっているが、実施に困難が予想される対象でありながら調査は着実に実施され、その内容も丁寧にまとめられている。特に訪問調査に基づく住居整備の具体的な方法についての考察は有用な結果を導いており、真摯で強い研究動機に支えられた優秀な修士論文として評価できるものである。

セルフビルドによる 版築造の実験的試み

正会員

畑中久美子 君.....神戸芸術工科大学

土を使ったセルフビルド建築に関する研究である。ワークショップをつくり版築造による実験建物をすべて自分たちで施工し、その結果を研究論文としてまとめている。性能面では、サーモグラフィーを用い土壁の蓄熱状態を調べ温熱環境について報告している。また、材料の圧縮強度を計測している。建築物としての版築造の構造的な検討が十分にされていないことや、研究論文として、一般的なまとめ方を必ずしもとっていない面があるが、研究過程で注がれたエネルギーが十分に示されており高く評価したい。

季節移住の継続要因からみる 複数地域居住のあり方 輪島市舳倉島の季節移住を事例に

正会員

前島一弥 君.....早稲田大学

本研究は、離島 輪島市舳倉島 に展開する季節移住に着目し、季節移住の継続要因と、複数地域居住を実現する『近隣づきあい』に着目した調査を行い、本土・島の2つの居住地を季節ごとに移住する生活スタイルの必然性、それを支える地域の人間関係などを明らかにしたうえで、複数地域居住にむけた提言と、両地域の改善計画の提案を行っている。本研究は、離島において培われてきた生活習慣や行動様式から、新たな生活スタイルとしての複数地域居住の可能性を志向しようとした独創的かつ意欲的な研究であり、計画系研究のあり方として高く評価された。論文の編集デザインの良さも魅力的である。

体躯、性別、年齢を考慮した 体温調節数値計算モデルの開発

正会員

小川一晃 君.....早稲田大学

本論文は温熱環境評価における体温調節数値計算モデルの開発について述べたもので、詳細な血管系モデルを採用することによって数値計算の精度を向上させるとともに、体躯に応じた物性値と制御式の変更によって標準的な体型の男性ばかりではなく、女性や高齢者等に対しても精度良く皮膚温度分布等が予測可能になったとしている。テーマ設定は所属研究室における継続研究の一環と思われるが、本論文に関わる研究の目的や位置づけが明確に述べられており研究方法から結果に至る論旨も明快であり、修士論文として高い水準にあると評価する。

都市火災の物理的延焼性状 予測モデルの開発

正会員

樋本圭佑 君.....京都大学

本論文は、都市火災の延焼状況を火災の物理的なメカニズムに則して定式化し、可燃物の燃焼・発熱や開口・周壁経路の失熱に基づいた都市火災のモデル化、外部熱環境のモデル化とその実証実験の後、仮想的な市街地で延焼シミュレーションを行っている。火災が継続すると延焼に要する時間間隔は短縮する、また、都市火災は単純な建物火災の重ね合わせではない、との結論は、今後の展開につながる貴重な知見であり、優秀論文として評価できる。